

横井先生のご退職にあたり

手帳のポケットに忍ばせた手紙を取り出す。大学院を修了して十年以上、ずっとそこにあって、見守ってくれた一枚だ。

「とっても授業がおもしろい先生がいるよ！」

大学に入って少し過ぎたころ、何かを思い出すようにすすく笑いながら、中学以来の友人のA子が声をかけてきた。そっかあ、どんな風に、と尋ねると、

「なんかね、いいんだよねー」

と、返ってきた。

二年になってまた科目登録の季節がきた。シラバスとにらめっこしていると、A子から、

「ねえ、前に話した、あの先生の授業とってみようよ」

と、誘われた。おっけー、と答えて、それが先生との出会

朝 日 彩

いのきっかけになった。

初回の講義でA子の「なんかいい」はすぐに理解できた。先生は、やさしい語り口で、古典文学とは、今を生きる私たちにとってどのような存在であるか、これからどうやって作品と向き合い、学んでいくのかということをお話になった。先生の穏やかな表情で、私の緊張は和らぎ、となりに座るA子と目を見合わせて笑った。少し身構えてしまふところのあった古典文学との距離が、ずっと近づいた瞬間だった。また、講義中の学生の私語には、厳しく対応してくださり、教室内の安心感と心地よさも格別だった。

そして、四年になると卒業論文のためのゼミが始まった。私は、中古文学ゼミを選んだ。以前、先生がおっしゃった、千年以上も人々を惹きつける源氏物語の力、というものに、

もつと触れてみたいと感じたからだ。ゼミでは、論文の書き方、調査方法を基本から教わり、身の引き締まる思いがした。たくさんの方の先行研究があるからこそ、今自分はここにいられるのだと実感した。心のどこかにあった文学は自分の感覚で楽しめればいいという考えは、もつと謙虚な姿勢に変わった。毎回のゼミは本当に楽しくて、あつという間に時間が過ぎていった。先生に解説していただきながら皆で巡った京都は、本当に贅沢な数日だった。卒業してから個人で京都を訪れるたび、なんて貴重な経験だったのだろうと改めて実感する。

先生の与えてくださった時間や見せてくださった世界は、あまりにも魅力的で、その後大学院への進学を望むようになり、許可していただいた。私が今教員としていられるのは、この二年間のおかげだ。向き合うほどにどこまでも深く広がる作品の世界に圧倒され、自分に見えている景色が限定的であることがわかって、出口のない迷路の中に入り込んでしまったように感じた。しかし、それと同時に、だからこそこれから先の人生もずっと関わって、一つずつ紐解いていきたいと思えたのだ。

私が高校生のころ、光源氏は、イケメンでモテモテで悩む姿も美しいスターだった。そのスターが、実はもつと人間的でかなくして愛おしい存在であることには気づかな

かった。そして、その周囲に、作者と、それを読み伝えてきた人々がいることを知らなかった。先生の道標で視界が広がるほどに、文学はその時々々に人を内側から癒し、養い、支えてくれるものだという考えを強くもてるようになった。

修了にあたって先生がくださった手紙には、この十数年、何度も何度も見返して唱えた言葉がある。「白石さんなら大丈夫」。先生がおっしゃるなら大丈夫というのと同じ時に、それを実現したいという気持ちで、教員になってからいつもお守りにしてきた。かつて光源氏がスターだったように、先生のお姿は、私の目にはいつまでもヒーローのように映っているけれど、これまでにはたくさんのご苦労がありだったことと存じる。先生がご尽力なさって切り拓き、学生たちに示してくださった世界へ、若い人たちが行き着けるように、その入り口を微力ながら守っていきたいと思っている。

横井先生、この度はご定年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。たくさんのご指導を本当にありがとうございました。いつもどこかに先生がいらっしゃることを心の支えにしてまいりました。これからもご壮健でご活躍くださいますようにお祈り申し上げます。